

## 令和7年度 千葉科学大学 入学宣誓式 学長式辞について

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。本日、千葉科学大学の一員として新たな一歩を踏み出されることを、心からお祝い申し上げます。長年にわたり皆さんを支えてこられたご家族の皆さまにも、心よりお喜び申し上げます。また本日は、ご多忙の中、ご臨席くださいました銚子市長越川信一様をはじめ、ご来賓の皆さまにも、厚く御礼申し上げます。

さて、これから始まる大学生活は、学問の探求にとどまらず、自らの生き方を形作る重要な時期でもあります。「人を助けたい」という大学である本学に入学された皆さんが、この先の人生を主体的に切り拓くための指針として、「自助」と「共助」の重要性についてお話ししたいと思います。

まず「自助」について考えてみましょう。思想家のサミュエル・スマイルズは、その著書『自助論』の中で、「天は自ら助くる者を助く」と述べました。これは、自ら努力し、道を切り開こうとする者にこそ、運命も味方するという教えです。大学では、誰かに指示されるのを待つのではなく、自分の意志で学び、行動する姿勢が求められます。困難に直面したとき、最初の一步を踏み出すのは、皆さん自身です。その一步こそが、未来を切り開く力となります。皆さんの目の前には「無限の可能性」という道が開かれています。ただし、自らその道に足を踏み出さなければ「可能性」のままで終わってしまいます。一步を踏み出す勇気こそが無限の成長へと導いてくれます。

しかし、人は決して一人だけで成長できるわけではありません。ここで重要になるのが「共助」の考えです。心理学者のレフ・ヴィゴツキーは、「最近接発達領域」という概念を提唱しました。これは、現時点では一人で達成できないが、他者からの適切な支援があれば達成できる発達の領域を意味しています。言うなれば、「今日、誰かの助けを借りてできたことは、明日には自分一人の力でできるようになる」ということです。つまり、みなさんが成長する上で、他者からの助けは欠かせないものなのです。大学には、共に学び合う仲間や、皆さんを支援してくれる教職員がいます。また、地域の方々も皆さんをサポートしてくれることでしょう。周囲の人たちの助けを大いに借りながら、自分の限界を超えて、成長していきましょう。

この「自助」と「共助」を実践した人物として、濱口梧陵を紹介したいと思います。彼は、江戸時代末期、紀州の広村（現在の和歌山県広川町）で生まれ、銚子のヤマサ醤油の第七代当主でもある人物です。彼が故郷の広村に帰っていた時、安政南海地震が発生し、津波の危険を村人に知らせるため、自分の大切な稲むら（稲の束）に火をつけ、避難を促しました。その後は、地域の人々の協力を得ながら、私財を投じて、村を津波から守るための堤防を完成させました。彼の行動は、まさに「自助」と「共助」の精神を体現したと言えます。皆さんも、大学での学びを通じて自らを高めると同時に、周囲の人たちと力を合わせ、よりよい社会を築く存在になってくれることを期待しています。

ここまで「自助」と「共助」について話してきましたが、「人を助ける」と一口に言っても、その方法はさまざまです。目の前で困っている人に手を差し伸べ、今まさに必要とされている支援を行うことも大切です。一方で、長期的な視点に立ち、健康で安全・安心な社会の構築に携わることもまた重要な助け方です。どちらが優れているというわけではあ

りません。大切なのは「人を助けたい」という想いを持つだけでなく、それを実際の行動に移すことです。大学生活の中で、多くの仲間、教職員、地域の方々との対話を通じて、自分には、どのような助け方が向いているのかを、しっかりと見極めて、将来の進路も考えてくれることを期待しています。

最後に、本学に入学された皆さんの「人を助けたい」という想いが、卒業するまでに「人を助けられる」能力（チカラ）へと変わり、その能力を活かして明るい未来を切り拓いていくことを心から願っています。

改めて、ご入学おめでとうございます。

令和七年四月七日

千葉科学大学 学長 藤本一雄